

(3) 「米四斗五升入」 160×30×10 011

(4) 「^(穿孔)米四斗五升入」 165×27×6 011

(5) 「御買上米四斗五升」□

・「
□ (163)×23×5 019

(5)の表の下端は、他の木簡から推察すれば「入」であるが、「一」(棒線)にしか見えない。裏は中央より若干下の部分に一字記されているが不明。

以上の五点は、三ノ丸(米蔵)に伴うもので、米俵に付した付札と考えられる。

(6) ・「
元和□年□□□□

・「
(120)×23×4 019

榎殻も多く出土したので、陶磁器などを榎殻で保護して搬入した際の付札であろうか。

9 関係文献

仙台市教育委員会『仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書』(『仙台市文化財調査報告書 第七六集』一九八五年)

(結城慎一)

宮城・市川橋遺跡

- 1 所在地 宮城県多賀城市高崎字水入
- 2 調査期間 一九八四年(昭59)一月～二月
- 3 発掘機関 多賀城市教育委員会
- 4 調査担当者 高倉敏明・滝口 卓
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(仙 台)

市川橋遺跡は、特別史跡多賀城跡の西側から南側にかけて、遺跡の西側を南北に流れる砂押川によって形成された自然堤防上に立地している。多賀城跡の周辺遺跡の発掘調査は、一九七九年から多賀城市教育委員会が実施してきており、館前遺跡をはじめ、次第に周辺地域の様相が明らかになってきている。

(仙 台)
調査は、住宅建設に伴う事前調査として実施した。



検出した遺構は、古代の溝跡五条ですべてが重複関係を有しており、木簡は最も古い溝跡から出土している。遺物は、須恵器杯、高台付杯、甕、赤焼き土器杯、灰釉陶器皿、瓦、土錘、木製品、鉄製品、砥石などがある。墨書土器は二三点を数え、その中には須恵器甕の体部に「郡進」と墨書されたものなどがある。木製品には、木簡の他に盤、曲物の蓋板と底板、弓などがある。

調査区に隣接する地区からは、平安時代前半～後半にわたる掘立柱建物跡、堅穴住居跡、井戸跡などの住居施設や、水田跡や溝跡などの生産遺構が発見されている。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「禁杖八十。」
(穿孔)

(111)×27×3 019

9 関係文献

多賀城市教育委員会『市川橋遺跡調査報告書―昭和五八年度発掘調査報告書―』(一九八四年)

(高倉敏明)

宮城・多賀城跡

- 1 所在地 宮城県多賀城市市川・浮島
- 2 調査期間 一九八四年(昭59)九月～十二月
- 3 発掘機関 宮城県多賀城跡調査研究所
- 4 調査担当者 高野芳宏ほか
- 5 遺跡の種類 国府跡
- 6 遺跡の時代 奈良時代～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

多賀城は、奈良・平安時代の陸奥国府であり、奈良時代には鎮守府も併置されていた。外郭は一辺六七〇～一〇〇〇mほどの不整形をなし、そのほぼ中央に東西一〇三m、南北一一六mの政庁跡がある。調査の結果、政庁跡には大別して第Ⅰ～Ⅳ期の変遷が把握される。各期の年代は、第Ⅰ期が多賀城創建の八世紀前半～八世紀中頃、第Ⅱ期が八世紀中頃～七八〇年の伊治公弼麻呂の乱による焼失まで、第Ⅲ期がその復興～八六九年の貞観の大地震による被災まで、第Ⅳ期がその修復～政庁の終末である一〇世紀中頃までとなる。

今回木簡が出土したのは、外郭西辺低湿地の区画施設の構造とその変遷を把握することを目的として実施した第四七次調査である。外郭西辺では、今次調査区の南方約一〇〇mの地点を対象とした一